

総論

満点	100点	目標得点	70点	試験時間	70分	偏差値	B:72
大問数	3	小問数	50				
【解答形式】		選択式	45/50問	記述式	5/50問	論述式	0/50問
【問題難易度】		C	3/50問	B	26/50問	A	21/50問
※問題難易度：C難問、B標準、A平易、を示す							

Topics

- 1：課題文や図表を読み解きながら設問に答える問題で、大問が3題、小問が50題出題されている。形式は選択式問題が45題、短字数記述式問題が5題で、選択式問題が数的には中心を占めている。選択問題のうち数的処理を要する問題が20題となっている。
- 2：Ⅰは作業日程管理を効果的に行うための「PERT (Program Evaluation and Review Technique)」という手法に関する問題。Ⅱは真理判断における論理的パラドックスをいかにして解消するかを主題にした課題文の読解問題。Ⅲは、現代の統計的決定理論による適正仕入れ量に関する問題
- 3：慶應商学部は例年「(株式・経営などの) 損益判断・計算」「命題・論理判断」「言語関連」「IT関連」「暗号問題」などから出題されるが、今回の出題内容も例年の傾向の範囲内である。また、選択式問題が多い・基本的な数的処理の問題や短字数型の記述問題が含まれている、という点も例年の傾向に合致している。出題内容は高校の授業では扱われない領域が中心だが、課題文や図表を吟味すれば対応が十分に可能なレベルの問題が大半で、全体としては標準レベルと言ってよい。分量も大問3題・小問50題は例年レベルである。

こんな力が求められる！

- 1：慶應商学部の小論文問題では標準的な小論文の問題は出題されない。基本的には長文読解・数的処理・論理判断の能力が求められる。課題文のテーマは「IT」「論理学」「経営学」「民事裁判の紛争処理」など、高校の授業では扱われないような題材で、論理的な筋道を把握しないと読解が困難な文章が多い。また、数的処理の問題を確実に解くためには、論理判断や確率・統計などに関する基礎知識は確認しておく必要がある。
- 2：慶應商学部の小論文は標準的な小論文の問題とは大きく異なる。形式・内容ともに独特の問題なので、過去問を十分に検討して慣れておくことが望ましい。問題数も制限時間(70分)に比べてかなり多いので、課題文や図表を見て素早くポイントを把握する力や適切な時間配分の能力なども必要となる。
- 3：特に今回の問題では次の能力が求められている。
 - 読解力：課題文の内容を正確に・迅速に理解する(Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ)
 - 数的処理能力：課題文の記述や図表をもとに、適切な計算をして求める答えを出す。
出題数が多いので正確さだけでなく、やはり迅速さも必要である(Ⅰ・Ⅲ)。
 - 論理的判断能力：命題・論理に関する課題文の読解では、特に論理的に緻密な読解や分析が求められる(Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ特にⅡ)。

大問別分析

【設問 I】

予想配点	45/100 点	時間配分の目安	25/70 分
字数	問 3 (2) : 50 字以内		
出題形式	課題文型		
出典	清水龍瑩著、岡本大輔補訂『経営数学』慶應通信		
設問形式	問 1 ・ 問 2 ・ 問 3 (1) : 選択式	問 3 (2) :	記述式
難易度	問 1 : A	問 2 : B	問 3 (1) : B (2) : C
※問題難易度 : C 難問、B 標準、A 平易、を示す			

●本大問の特徴・概要

建設工事、新製品開発などのように、多数の作業によって構成されるプロジェクトの日程管理に用いられている「PERT(Program Evaluation and Review Technique)」という手法に関する課題文と図表を読み解きながら設問に答える問題である。問 1 は空欄補充の選択式問題。問 2 は適切な数字をマークする選択式問題。問 3 (1) は選択式問題、問 3 (2) は 50 字以内の記述問題。問 2 ・ 問 3 (1) は簡単な計算が必要となる。

●注目すべき箇所：以下、項目ごとにお茶ゼミ論文科の予想採点基準を提示する。

- 問 1 課題文の第 2 段落の説明を読めば解答できる。 (各 1 点 計 9 点)
- 問 2 表と図に基づいて最早開始時刻と最遅完了時刻を計算して解答する。最早開始時刻は対応する各作業の所要日数を合計することで算出できる。一方最遅完了時刻は、完了結合点の最早開始時刻の日数から対応する各作業の所要日数の合計を引くことで算出できる。 (各 2 点 計 28 点)

問 3 (1)

解答欄 (38) 図のアからキの各結合点に問 2 の方法で最早開始時刻と最遅完了時刻を記入したとき、両者の時刻が合致している結合点と合致しない結合点が出てくる。このうち、合致している結合点をたどった経路を選択すると、それがクリティカル・パスである。問 1 ・ 問 2 を順にきちんと解答してきた場合は、この問題の解答もすぐに出すことができる。

解答欄 (39) 作業 B の所要日数を 4 日から 1 日に改めて、最早開始時刻と最遅完了時刻を算出し、クリティカル・パスを判別する。 (各 2 点 計 4 点)

問 3 (2)

クリティカル・パス (Critical Path) とは文字通り「危険な道」「臨界経路」という意味で、①余裕のないぎりぎりの最短経路を意味する。最短経路なので、②ここで作業に遅れが出ると、作業日程全体に遅れが出ることになる。そのため、クリティカル・パスで遅れが出ないように管理の重点を置くことが必要なのである。

(得点)

- A 内容 : ①②の内容が記されている (必須条件。この要件に合致しなければ得点なし)。
 - B 字数 : 40 字以上 (30~39 字は 1 点減点/30 字未満は得点なし)。
 - C 表記 : 分かりやすく記されており、誤字・脱字・判別不能または困難な文字がない (原則として該当箇所 1 か所ごとに 1 点減点)。
- (A ・ B ・ C に合致した場合のみ 4 点満点)

【設問Ⅱ】

予想配点	25/100点	時間配分の目安	20/70分
字数	問3：150字以内 問4：60字以内		
出題形式	課題文型		
出典	A・F・チャルマーズ著 高田紀代志・佐野正博訳 『科学論の展開—科学と呼ばれているのは何なのか?—』恒星社厚生閣		
設問形式	問1：選択式 問2：選択式 問3：記述式 問4：記述式		
難易度	問1：A 問2：A 問3：C 問4：B ※問題難易度：C難問、B標準、A平易、を示す		

●本大問の特徴・概要

科学理論における实在主義は道具主義に比べて生産的であるが、实在主義における真理の観念にはすぐにパラドックスを導いてしまうという問題があった。だがこのパラドックスは、「対象言語」と「メタ言語（対象言語を対象としてそれについて語るための言語）」とに体系的に区分することによって解消できるという、論理学者アルフレッド・タルスキーの見解が述べられた課題文の読解問題。問1・問2は空欄補充の選択式問題。問3・問4は短字数の記述式問題。

●注目すべき箇所：以下、項目ごとにお茶ゼミ論文科の予想採点基準を提示する。

問1 第1段落の8～9行目に「道具主義によれば、コペルニクス理論の中で言及されている天体運動は虚構である」という記述がある。 (1点)

問2 空欄に、「1. 対象言語」か「2. メタ言語」のどちらか適切と考える方を選択する問題。

解法例

解答欄(41) = 「どちらの文も他方に言及しているとは考えられない」という直後の記述から「1. 対象言語」と判断できる。

解答欄(42) = 「もっと包括的な言語」という直前の記述から「2. メタ言語」と判断できる。

(各1点 計11点)

問3 ①道具主義では理論は虚構と見なされるので、観測値と異なっても問題視されにくい。

②实在主義では理論は事実と対応するべきだとされるので、観測値と理論値が異なった場合には、理論の再検討が行われ、科学理論の進歩が促されやすい。

(得点)

A 内容：①②が対比されて明示されている（必須条件/両方が明記されていなければ得点なし）。

B 字数：120字以上（90～119字は1点減点/90字未満は得点なし）。

C 表記：誤字・脱字・判読不明・困難な箇所がない（原則として1か所で1点減点）。

(A・B・Cに合致したときのみ9点満点)

問4 下線部(b)が記されている、第6段落の1～6行目の記述がそのまま解答の主旨になる。⇒「対象言語」と「メタ言語」を体系的に区別することで、文章による真偽判断の際のパラドックスを回避できることを示したこと。

(得点)

A 内容：上記と同趣旨の内容が明示されていること（得点の必須条件）。

B 字数：50字以上（36～49字は1点減点/36字未満は得点なし）

C 表記：誤字・脱字・判読不明・困難な箇所がない（原則として1か所で1点減点）。

(A・B・Cに合致した場合のみ4点満点)

【設問Ⅲ】

予想配点	30/100点	時間配分の目安	25/70分
字数	問3：15字以内 問4：150字以内		
出題形式	課題文型		
出典	宮川公男著『統計学でリスクと向き合う』東京経済新報社		
設問形式	問1：選択式 問2：選択式 問3：記述式 問4：記述式		
難易度	問1：B 問2：B 問3：B 問4：C ※問題難易度：C難問、B標準、A平易、を示す		

●本大問の特徴・概要

課題文は、福澤諭吉の『文明論の概略』を引用しつつ、統計学上の理論に基づいて商品の適正在庫量を算出するための考え方と実際の計算法を検討した著作の引用である。問1は空欄補充の選択問題。問2は適切な数字をマークする選択式問題。問3は課題文中から適切な箇所を抜き出して記入する記述式問題。問4は短字数の記述式問題である。

●注目すべき箇所：以下、項目ごとにお茶ゼミ論文科の予想採点基準を提示する。

問1 (52) (53) ~ (58) (59) は、福澤諭吉『文明論の概略』の引用部分中に適切な語を補充する問題。明治期の古い字体や語句が用いられているが、前後の文脈などから十分推測は可能。

(60) (61) では $(x+1)$ 個の商品が売れ残る確率が仮に $1/3$ だとすると、 $(x+1)$ 個の商品が売り切れる確率は $2/3 (= 1 - 1/3)$ になることから容易に導き出せる（ある商品が売り切れる確率と売れ残る確率の和は 1 (100%) になる）。(各2点 計10点)

問2 (62) (63) (64) (65) は、課題文の第3段落以降の説明を読めば容易に解答できる。

(66) (67) は $C_v / (C_v + C_o) = 1/8 = 0.125$ であることに注意。表から $P = (y \leq x)$ が 0.125 よりも大きく、 $P = (y \leq x+1)$ が 0.125 よりも小さい需要 y 個を求めれば 19 個であることが分かる。

(各2点 計6点)

問3 確率分布を統計的に推定するためのデータを収集する上では、人々の行動を個々別々に見るのではなく、全体的に分析する必要がある。このことは確率や統計の初歩的知識である。課題文からの引用なので、1か所でも誤字・脱字・判読不明または困難な箇所があれば得点はない。(4点満点)

問4 いくつかの解釈が可能。基本的な解釈例を記しておく。

①『文明の概略』中の「売物の仕入れを為す者は世間の景気を察して常に余計の品を貯ることなし」というという記述から、福澤の時代の菓子屋は売れ残りが出ないように少なめの仕入れをしていたことが分かる。

②一方 (b) 式と表からは、「残品が発生する確率」を「0」にするためには、表中の最適仕入れ量よりも少なめに仕入れた方がよいことが分かる。

③以上の点で、(b) 式の内容と明治期の菓子屋の仕入れ方とは一致している。

(得点)

A 内容：上記と同趣旨の内容が明示されていること（ただし同程度に論理的な説明内容なら可）。

B 字数：120字以上（90～119字は1点減点/90字未満は得点なし）

C 表記：誤字・脱字・判読不明・困難な箇所がない（原則として1箇所まで1点減点）。

(A・B・Cに合致した場合のみ 10点満点)